

先

日、所用があつて松江市から出雲市までJRの普通列車で行つてきました。何ゆえ自動車を使わなかつたといえ、交通違反で免許になつたとかではなく、ただ単に用事と

いうのが酒を飲むことだつたからに過ぎません。鉄道で出雲までというのは思い出せないくらい久々のことで、ガタンコトンコトンというレールの継ぎ目を拾うリズムミカルな音が心地よく、また懐かしく心に響いてきました。両親の実家は両方とも出雲なのですが、私が中学校に上がるまで父は自動車の運転免許証を持つておらず、それまで祖父母の家に遊びに行くときはいつも国鉄か一畑電車を利用していたからです。

心地よい揺れにねんたがさばりましたが、列車が出雲市駅に近づくにつれある記憶が蘇りました。当時母の実家が出雲市駅から松江方面に一キロばかりの線路沿いにあつたことを。玄関を出ると家の前の細い砂利道のすぐ向こうが土手になつていて、その上が線路でした。だから母の実家に行つたときは、目の前を走る汽車や電車を眺めるのがとても楽しみでした。そして松江に帰るときは、出雲市駅発の時刻を祖父母に伝えておくと、私たちの乗つた列車が通過するころに家の前に出

て手を振つて見送つてくれました。もちろんこちらも見逃さないように窓に顔をくつつけるようにして手を振り返したものです。

それを思い出した私は、母の実家のあつた場所を確認しようと昔のように窓に顔をくつつけるようにして流れる風景に目を凝らしました。随分前に引越しをしているので家自体は跡形も無くなっている可能性が高かつたのですが・・・何とありません、それらしい廃屋が残つていたのです。ほんの一瞬でしたが見紛うはずがありません。進行方向は逆でも、祖父母が手を振つていようような幻が見えたのです。もう半世紀以上昔のことなのに、人というのは記憶の海の中を漂いながら生きているのだとつくづく感じました。

私が小学六年生になつたころ母の兄が郊外の住宅地に家建て、祖父母もそこに移り住むことになりました。けど、そこはもう慣れ親しんだお爺ちゃんお婆ちゃんのお家ではなく、無愛想だった伯父さんの見知らぬ家。気兼ねなく遊ぶこともできず、汽車を眺める楽しみもなくなりました。その後、事情があつて伯父の家には行くことができなくなり、祖父母との思い出も途絶えてしまつたのでした。

木幡智恵美

11

古い古いに

阪

神淡路大震災という未曾有の災害に見舞われた一九九五年。その四月に夕焼け通信は三年目に突入した。そして、六月十二日には百号に達し記念号を発行する。編集長が事前に寄稿をお願いしていたところ、たくさんの人から文章を寄せていただき、通常B五版で三段組み四ページの紙面が、この百号記念通信は十二ページにまで膨らんだ。

県内は安来市、松江市、出雲市、江津市から、県外は米子市、高知市、岐阜県から、精力的に執筆活動を行っている方のみならず夕焼け通信を毎月読んで下さっている方など、広い範囲からたくさんの方に随筆、随想、短歌などを寄せていただいた。

その中で、ある方は夕焼け通信が百号まで続いた要因を分析して下さい。五項目あり、簡潔にまとめさせてもらおうとこうだ。一、スタッフの熱意、二、執筆陣の筆力、三、無償であり、読んでもらうことに喜びを感じていること、四、身内だけの閉鎖的な物でなく公開性であること、五、熱心な読者を持つていること。二についてはちよつと首を傾げてしまうけど、あとは頷ける。さすがに広報に携わつていらっしゃる方々の分析だ。最後に、「この通信が百号と言わず、二百号、千号と継続することを心から祈念いたしております。」と結ばれているのだが、実際千号をはるかに超えて発行し続けているとは、誰も思っていないかただろう。ただ、現在は書き手が限られてしまつていて、五項目が必ずしも守られていないとは言えない。一については、スタッフが減つてしまった。熱意については、炎をあげるのではなく熾火のように静かに燃え続けている。二は当時から首をすつと上げることができずにいる。三は当時のまま徹しているし、四も心がけは変わらずにいる。そして、何といつても一番は五だ。飽きもせず読んでくれる方がいるということ。

今年、編集長は秋鹿で開催された敬老の日の集いに招かれたそう。その際、集まつた人たちの口から夕焼け通信の話題が出たとのこと。百号記念誌の中に、公民館の職員さんが利用者である地域の方に声掛けしてくださつていて、夕焼けに秋鹿はなくてはならない地となりそうだとの記事がある。発祥の地秋鹿は、夕焼け通信のふるさとなのだなど改めて思う。



30代フリーター 与党が過半数割れたのは裏金のせいだけか。

年金生活者 「自民1強」が崩れた背景には「米1強」の終わりがあつた。東西冷戦の終結が55年体制を崩壊させ、「1強」だった自民党を初めて下野させたように、アメリカの覇権の後退が、第2次安倍政権から始まった「ネオ55年体制」を突き崩した。

自民党はアメリカに押しつけられた憲法の改正を党是としながら、現実の外交は一貫して親米的であり続けた。敗戦国としてアメリカに逆らえなかつたからだけでなく、覇権国家のアメリカに安全保障をゆだねるのが戦後の復興・発展にとって最も合理的な選択と考えていたからだ。

東西冷戦が終わったとき、アメリカの一極支配が確立したように見えた。だが、ソ連という敵を失ったことで西側陣営の結束は緩み、その頭目だったアメリカは強いリーダーシップを発揮できる条件を奪われた。

そうした政治的な変化は経済レベルのように、資源の払底や自然破壊を制御する柔軟性を備えている。また農村が労働力⇨消費者の供給源となるのは産業資本主義の段階について言えることで、現在のポスト産業資本主義あるいは消費資本主義と呼ばれる段階には必ずしも当てはまらない。

30代 資本主義がこのまま存続するとして、次の覇権国家になるのはやはり中国だろう。

年金 それが現実のものになるには、この「帝国」の民主化が必須の条件となる。

ヘゲモニー国家になるには、その国の通貨が現在の米ドルのように基軸通貨になる必要がある。中国やインドがヘゲモニー国家になるには、かつて基軸通貨が英ポンドから米ドルに替わつたように、人民元ないしインドルピーが米ドルに取って代わらなければならぬ。

基軸通貨は世界中に流通する通貨、世界中から信用される通貨でなければならぬ。その信用を裏づけるのは、通貨を発行する国に対する信用であ

ではグローバルゼーションとして進化した。その波に乗って経済大国化した中国は軍事大国にもなり、世界でのアメリカの地位を低下させた。それは親米一辺倒の日本外交が危うくなることを意味した。

しかし、自民党政権が選んだのは対米追従をやめることではなく、逆にそれを補強し、拡大することだった。だが、同盟をどれだけ強化しても、中国の軍拡を抑えるどころか、ますます促す恐れがある。緊張と不安定さが増し、日米同盟は以前のような東アジアの安定を担保する力を持ち得なくなった。

30代 アメリカに代わる覇権国家は誕生するのか。

年金 柄谷行人は『帝国の構造』の中で、近代史は自由主義的な段階と帝国主義的な段階が交互に入れ替わりながら進展し、ヘゲモニー国家（覇権国家）が存在するときには前者に、それが不在のときに後者になるというウォーラー・ステインの考えを紹介している。

ヘゲモニー国家はこれまでオランダ、

り、その信用を担保する条件のひとつが統治の透明性だ。物事の決定の経緯が内外に公にされ、その説明がなされる必要がある。

共産党独裁の今の中国はそれにはほど遠い。共産党のトップの野心や党内の権力闘争で事が決まるような国家の通貨はいづ暴落するかわからないとい

イギリス、アメリカと推移してきて、現在はそれが不在となり、次のヘゲモニー国家の座を争う帝国主義的な段階にあるとされる。

では次にヘゲモニーを握るのはどの国なのか。柄谷は「それがヨーロッパや日本でないことは、確実です。人口から見ても、中国ないしインドということになります」と述べたあと、「が、このような推測は、世界資本主義が存続すると仮定した場合にのみ成り立ちます」と、それが条件付きであることをことわっている。

その根拠として「中国やインドの経済発展そのものが、世界資本主義の終りをもたらす可能性」をあげる。中国やインドの産業発展は大規模なので、資源の払底、自然の破壊に帰結し、さらに農村を消滅させるので、産業資本主義に必須の新たな労働力⇨消費者の供給源を枯渇させる、と柄谷は予測する。

だが、資本主義は利潤の源泉を狭めるように見えた脱炭素を逆に新しい利潤の源泉にしてしまったことに見られる不安を他の諸国に抱かせる。通貨価値の安定という基軸通貨の要件を満たすことができない。

30代 中国が民主化する可能性はあるだろうか。

年金 民主制の国家⇨国民国家は17世紀のヨーロッパで神聖ローマ帝国の解体とともに誕生した主権国家が市民革命を経て到達した国家形態だ。平等を理念的な支えとする民主制は国民の等質性を前提としている。等質性は広大な国土では実現しにくい。諸民族、諸勢力で構成される帝国には不向きだ。

中国が民主化するとしたら、「帝国」が解体し、いくつかの国民国家に分かれたり、州の独立性の強い連邦国家が生まれやすくなるのが道筋のひとつとして考えられる。つまり、台湾のような国家が大陸に誕生したり、アメリカのような連邦国家ができたりすることだ。たとえば、香港国、モンゴル国、ウイグル国、北京上海連邦といったぐあいに。もしかしたらそのどれかが覇権国家になるかもしれない。

ニュース日記 945
中村 礼治

「米1強」の終わりが 「自民1強」を崩した